

終助詞の意味の体系性に関する試論
—富山県井波方言の場合—

井上 優

キーワード：終助詞、富山県井波方言、平叙文

要旨

富山県南砺市井波地区の方言（井波方言）の平叙文専用の終助詞は、Ⅰ「チャ、ワ」、Ⅱ「ゼ、ジャ、ガ」、Ⅲ「ゾ」という三つのグループからなる。Ⅰ「チャ、ワ」は話し手の判断のあり方を表し、終助詞を用いない文（ ϕ ）とともに、「暫定的判断（ワ）—確定的判断（ ϕ ）—既定事項確認（チャ）」という体系をなす。また、Ⅱ「ゼ、ジャ、ガ」は、既存の認識と現実とが矛盾する状況において、話し手がその矛盾にとまどっていること（ゼ）、話し手が自分の認識を誤りと認めて現実を受け入れること（ジャ）、誤った認識が存在する（存在した）ことに話し手が違和感を覚えていること（ガ）を表す。Ⅲ「ゾ」は聞き手に対する情報の受け入れ要請を表す。

1. はじめに

本稿では、筆者の母方言である富山県南砺市井波地区の方言（以下「井波方言」）の終助詞のうち、平叙文で用いられる主要な終助詞「チャ」、「ワ」、「ゼ」、「ジャ」、「ガ」、「ゾ」に焦点をあてて、その意味の体系性について考察する。

- (1) a. ホンマヤチャ。(本当だよ。)
- b. ホンマヤワ。(本当だよ。)
- c. ホンマヤゼ↑。(本当だぞ↑。)
- d. ホンマヤジャ。(本当だよ。)
- e. ホンマヤガ。(本当だよ。)
- f. ホンマヤゾ。(本当だぞ。)

（「↑」は文末で上昇することを表す。以下同様。）

「チャ」、「ワ」、「ゼ」、「ジャ」、「ガ」、「ゾ」は平叙文でのみ用いられ、疑問文や命令文では用いられない。このうち、「ゾ」は「話し手にとって既定の情報を提示し、聞き手にその情報を受け入れるよう求める」（小西 2016:169）ことを表すが、これは標準

語「ぞ」とほぼ同じである。これに対し、「チャ」、「ワ」、「ゼ」、「ジャ」、「ガ」に対応する表現は標準語にはなく、いずれも「よ」、「ぞ」で訳しうるが、それぞれの意味はかなり異なる。

「チャ、ワ」、「ゼ」、「ジャ」については、それぞれ井上(1995a)、井上(1995b)、井上(1998)で詳細な意味分析をおこなった。「ガ」については、井波方言の終助詞について概観した井上(2006)で概略的な説明をおこなった。ただし、これらの研究は、一定の体系化を念頭に置きつつも、各終助詞の意味を具体的な形で把握することに重点を置いており、井波方言の終助詞の意味の体系性にまでは考察が及んでいない。

本稿では、「チャ」、「ワ」、「ゼ」、「ジャ」、「ガ」、「ゾ」に関する個別の分析の結果をふまえながら、これらの終助詞がどのような意味の体系をなすかについて考察する。分析は筆者の内省にもとづく（筆者は1962年井波生まれ。18歳まで井波在住）。

2. 基本的な見通し

本稿では、終助詞の意味の体系を次の二つのレベルに分けて考える。

- ①当該の言語や方言の終助詞はどのようなグループから構成されるか。そして、各グループはそれぞれどのような意味特徴を有するか。
- ②それぞれのグループに属する終助詞は互いにどのような関係にあるか。

まず、①について述べる。前節であげた研究の記述をもとに考えると、「チャ」、「ワ」、「ゼ」、「ジャ」、「ガ」、「ゾ」は次の三つのグループに分けるのが自然である。

(2)

I	話し手の判断のあり方（情報の質） チャ：既定事項の叙述（井上 1995a） ワ：個人的見解の叙述（井上 1995a）
II	話し手の気持ちの動き ゼ：既存の認識と現実の矛盾に対するとまどい（井上 1995b） ジャ：現実に合わせて話し手の認識の修正（井上 1998） ガ：現実が理解されていないことへの異議（井上 2006）
III	聞き手に対する働きかけ ゾ：情報の受け入れ要請（小西 2016）

I「チャ、ワ」は、「既定事項」、「個人的見解」といった話し手の判断のあり方（あるいは情報の質）を表す終助詞であり、話し手の判断内容に対する確認や共感要請を表す「ネー」（ねえ）と組み合わせることができる（井上(2010)では「チャ、ワ」を判

断系の終助詞と呼んだ)。

- (3) a. ホンマヤチャネー。(本当だよねえ。)
b. ホンマヤワネー。(本当だよねえ。)

I「ぜ、ジャ、ガ」は、既存の認識と現実が矛盾する状況における話し手の気持ちの動き(井上(2010)では「矛盾に対する思い惑い」と呼んだ)を表す終助詞である。また、II「ゾ」は、聞き手に対する働きかけを表す終助詞であり、具体的には聞き手に情報の受け入れを要請することを表す。これらは「ネー」(ねえ)と組み合わせることができない。

- (4) a. ホンマヤぜ(*ネー)。
b. ホンマヤジャ(*ネー)。
c. ホンマヤガ(*ネー)。
d. ホンマヤゾ(*ネー)。

次節以降では、(2)のグループ分けのもとで、「②それぞれのグループに属する終助詞が互いにどのような関係にあるか」について考察する。3.ではI「チャ、ワ」について、4.ではII「ぜ、ジャ、ガ」について述べる。

考察の前に一点補足する。「チャ」、「ワ」、「ぜ」、「ジャ」、「ガ」、「ゾ」の分類そのものは、(2)とは別の観点からも可能である。例えば、「チャ、ワ、ぜ、ジャ、ゾ」は推量形「ヤロ」(だろう)にはつかないが、「ガ」だけは「ヤロ」にもつく。

- (5) a. ホンマヤロ{*チャ/*ワ/*ぜ/*ジャ/*ゾ}。
b. ホンマヤロガ。(本当だろうが。)[確認要求]

また、「ワ、ガ、ゾ」は語気を強める終助詞「イネ」と組み合わせることができるが、「チャ、ぜ、ジャ」は「イネ」と組み合わせることができない。

- (6) a. ホンマヤチャ(*イネ)。
b. ホンマヤワイネ。(本当だよ。)
c. ホンマヤぜ(*イネ)。
d. ホンマヤジャ(*イネ)。
e. ホンマヤガイネ。(本当だよ。)
f. ホンマヤゾイネ。(本当だよ。)

現時点では、推量形への付加の可否、および「イネ」との組み合わせの可否は、体系に関わる問題というよりは、各終助詞の個別の性質に関わる問題としてとらえるのがよいと考えているが、本稿ではこの点に関する検討はおこなわない。

3. グループ I : 「チャ」、「ワ」

まず、話し手の判断のあり方を表す「チャ」、「ワ」の関係について考える。

「チャ」は、「このことはすでに真であることが定まっている既定事項である」という心的態度を表す(井上 1995a、井上 2006)。具体的には、「ここは…と考えれば十分だ(それ以外のことは考える必要はない)」、「ここは…と考える(言う)しかない」といった気持ちで、当該情報が既定事項であることを話し手の中で確認しながら述べるときに「チャ」を用いる。

- (7) (「当然だ」という気持ちで)
ソリヤ ソーヤチャ。(そりゃそうだよ。)
- (8) (「余計な心配をする必要はない」という気持ちで)
コングライ ドモナイチャ。アンタナラ デキッチャ。
(これぐらい大丈夫だよ。あなたならできるよ。)
- (9) (「こう考えてもらえば十分だ」という気持ちで)
オラ ココデ マットツチャ。(私はここで待っているよ。)
- (10) (「どうせだめに決まっている」という気持ちで)
アンタ、ソンナコト ヤッテモ アカンチャ。
(あなた、そんなことをやってもだめだよ。)
- (11) (「こうするしかない」という気持ちで)
ワカッタチャ。ヤッチャ。ヤリヤ イーガヤロ。
(わかったよ。やるよ。やればいいんだろう。)
- (12) (「君に頼む以外にない」という気持ちで)
タノンチャ。(頼むよ。)
- (13) 甲：ビールデモ ノミニ イコマイケ。
(ビールでも飲みに行こうじゃないか。)
乙：(「申し訳ないが、実は」という気持ちで)
ソング、キョー クルマナガイチャ。
(それが、今日は車なんだよ。)

次の例では、「確かに…だ(それは私も認める)」という気持ちで「チャ」が用いられている。この場合も、話し手は当該情報が既定事項であることを自分の中で確認しながら述べている。

- (14) タシカニ アノヒトコサ マジメヤチャ。
(確かにあの人はまじめだよ。(それは私も認める。))

「チャ」に上昇音調を加えて「チャー↑」と言うと、当該情報が既定事項であることを話し手の中で確認しながら聞き手の反応をうかがうという意味の文になる。

- (15) (聞き手の様子を見ながら念をおす)
オラ ココデ マットルチャー↑。
(私はここで待っているからね。(いいね。))
- (16) 甲：アンタ、ホンマ ヒサシブリヤチャー↑。
(あなた、本当に久しぶりだよねえ。)
- 乙：ホンマヤチャー↑。
(そうだよねえ。)

「ワ」は、「今この場で自分が判断する（考える、見る、感じる、知る）かぎりではこうだ」という個人的見解を述べる表現である（井上 1995a、井上 2006）。当該情報を「話し手の推論・知識・感覚・記憶の範囲内での暫定的判断」として述べるときに「ワ」を用いると言ってもよい。

- (17) 甲：コレ ダレノガ？（これは誰の？）
乙：（「私が見るかぎりでは」という気持ちで）
タブン オラノガヤワ。（たぶん私のだよ。）
- (18) (患者を診察した医師が「今見たかぎりでは」という気持ちで)
コングライナラ チョッコ ヤスマヤ ナオルワ。
(これくらいなら少し休めば治るよ。)
- (19) (料理を一口食べて感じたことを述べる)
コリヤ ンマイワ。（これはうまいよ。)
- (20) 甲：田中サン、ミナンダ？
(田中さん、見なかった？)
乙：（「私を知る範囲では」という気持ちで）
ソトデ タバコ スツテヤツタワ。
(外でタバコを吸っておられたよ。)
- (21) (「私の記憶の範囲では」という気持ちで)
ソーイヤ、ソンナコト アツタワ。
(そういえば、そんなことがあったよ。)

(22) (相手が行くと言うのを聞いて、自分も行く気になり)

アンタ イクガナラ、オラモ イクワ。

(あなたが行くのなら、私も行くよ。)

「ワ」を含む文は、聞き手に事実を控えめに伝える場合にも用いられる。この場合、「ワ」を用いて当該情報を話し手の個人的見解として述べることにより、断定の語気が緩和される。

(23) (聞き手の背中に何かついているのが見えた。)

アンタ、セナカニ ナンカ ツイトルワ。

(あなた、背中に何かついているよ。)

「チャ」、「ワ」の意味的な関係は、終助詞を用いない文（以下「 ϕ 」と表記）も視野に入れて、「確信する」、「保証する」という意味の有無という観点から、次のように整理することができる。

(24) Pワ (Pを暫定的判断として述べる) [-確信、-保証]

P ϕ (Pを確定的判断として述べる) [+確信、-保証]

Pチャ (Pを既定事項として確認しながら述べる) [+確信、+保証]

(24)が意味することは、無標形式である「P ϕ 」は「+確信、-保証」という意味の文であり、「確信」と「保証」のいずれか一方がそれと異なる値をとる場合は、有標形式である「Pワ」、「Pチャ」が用いられる、ということである。例えば、次の三つの文の意味を考えよう。

(25) a. ドモナイ。(大丈夫だ。)

b. ドモナイワ。((私が判断するかぎりでは)大丈夫だよ。)

c. ドモナイチャ。(大丈夫だよ。(そうでない可能性は考えなくてよい。))

終助詞を用いない(25a)は、「大丈夫だ」ということを確定的な判断として述べる文である。この場合、話し手は「大丈夫」だと確信はしているが、「大丈夫だと保障する」とまでは言っていない。

「ワ」を用いた(25b)は、「私が判断するかぎりでは」という気持ちの文であり、話し手は「大丈夫だ」ということを、確信に至る手前の暫定的な判断として述べている。

「チャ」を用いた(25c)は、不安そうにしている聞き手に「大丈夫に決まっている(私が保証する)」という気持ちで言う、あるいは、誰かが「大丈夫だ」と言ったことに賛

同して「確かに大丈夫だ（それは私も認める）」という気持ちで言う文である。いずれの場合も、話し手は「大丈夫だ」という情報が既定事項であることを自分の中で確認しながら述べている。

4. グループⅡ：「ゼ」、「ジャ」、「ガ」

次に、「既存の認識と現実との矛盾」に関わる心的態度を表す「ゼ」、「ジャ」、「ガ」の関係について考える。

「ゼ」は、上昇音調をとめない、「話し手の既存の認識と逆の現実が存在することにとまどいを感じている」ことを表す（井上 1995b、井上 2006）。予想外の現実にあて「すぐには受け入れられない。どういうこと？（何かの間違いではないか?）」と感じたときに「ゼ」を用いると言ってもよい。標準語に「ゼ」に相当する終助詞はなく、「ぞ↑」、「よ↑」あるいは「じゃないか」と訳すしかない。

(26) (さっきまであったメガネが見あたらない)

オラノ メガネ ナイゼ↑。サッキマデ ココニ アッタガイゼ↑。
(私のメガネがないぞ↑。さっきまでここにあったんだよ↑。(どういうこと?))

(27) (聞き手の顔色がいつもに比べて悪いのを見て)

アンタ チョッコ カオイロ ワルイゼ↑。
(あなた、ちょっと顔色が悪いよ↑。(どうしたの?))

(28) (ふだんネクタイをしめない聞き手がネクタイをしめているのを見て)

アンタ ネクタイ シトルゼ↑。キョー ナンカ アルガ？
(あなた、ネクタイをしているじゃないか。(どうしたの?) 今日何かあるの?)

実情説明を表す「ガイ」(のだ)に「ゼ」がつく場合は、上昇音調をとまわなくてもよいが、その場合も「どうしてそうなのか理解できない」という気持ちを表す。

(29) アノヒト ウソバッカ ユーガイゼ (↑)。

(あの人、うそばかり言うんだよ。(どうしてそんなことができるのか理解に苦しむ。))

(30) 痛風ユータラ ホンマ イタイガイゼ (↑)。

(痛風というのは本当に痛いんだよ。(「どうしてこんなに痛いのか」と思うくらいだ。))

「ジャ」は、予想外の現実にあて話し手はその場で「自分のこれまでの認識は誤

りであり、これまでの認識を改めなければならない」と感じていることを表す（井上1998、井上2006）。「現実がこうであるとはまったく予想していなかった」という気持ちで認識を改めるときに「ジャ」を用いると言ってもよい。標準語では、「意外にうまいや」、「けっこう重いや」の「や」がこの意味を表す。標準語の「や」は形容詞にしつかないが、井波方言の「ジャ」は動詞や名詞述語にもつく。

- (31) (一見軽そうな荷物を持ってみたら意外に重かった)
 モッテミタラ ケッコー オモイジャ。
 (持ってみたらけっこう重いよ。)
- (32) (難しいと思っていたが、やってみたら意外に簡単にできた)
 ヤッテミタラ デキタジャ。
 (やってみたらできたよ。)
- (33) (自分の娘とは思っていなかった学生が自分の娘であることがわかり)
 ヨー ミタラ オラノ ムスメヤジャ。
 (よく見たら、私の娘だよ。)
- (34) (スープに塩を入れるのを忘れていたことに気づき)
 シオ イレルガ ワスレトッタジャ。
 (塩を入れるのを忘れてたよ。)
- (35) (傘を持ってこなかったことを後悔して)
 ヤッパ カサ モッテクルガヤッタジャ。
 (やっぱり傘を持ってくるんだったよ。)

「ジャ」は、聞き手に単刀直入に言いにくいことを述べるときにも用いられる。「ジャ」を用いて「…だと認めざるをえない」という気持ちを表すことが、「本意ではないが言わざるをえない」という気持ちを暗示することにつながるのである。

- (36) (聞き手の背中に何かついているのが見えた。)
 アンタ、セナカニ ナンカ ツイトルジャ。
 (あなた、背中に何かついているよ。)

「ガ」は、「現実が十分に理解されていない」ことに対する異議の気持ちを表す（井上2006）。前述の「ジャ」が「話し手が自分の認識が誤っていたことを認めて現実を受け入れる」という気持ちで用いられるのに対し、「ガ」は「他者の（あるいは話し手自身の過去の）誤った認識に違和感を覚えている」という気持ちで用いられる。

次の例では、他者が誤った認識を持っていることに対して、話し手が「現実は何になぜそれがわからないのか？」と感じていることが「ガ」で表されている。

- (37) (聞き手がものを乱暴に扱っているのを見て)
ソナシタラ コワレテシモガ。
(そんなふうにしたら壊れてしまうよ。(なぜそんなことも理解できないのか?))
- (38) (子どもでも知っていることを聞き手が知らないことがわかり)
ソナコト コドモデモ シットルガ。
(そんなこと、子どもでも知っているよ。(なぜそんなことも理解できないのか?))
- (39) 甲：メガネ ナン ミツカラン。
(メガネが全然見つからない。)
乙：ドコ ミトンガケ。ココニ アルガ。
(どこを見ているの。ここにあるよ。(なぜこんなことに気づかないのか?))
- (40) (ある人物があいかわらず不適切な発言をしているのを聞いて)
アノヒト、マダ アンナコト ユートルガ。
(あの人、まだあんなこと言っているよ。(なぜ自分が不適切な発言をしていることに気がつかないのだろうか?))

「情報の受け入れ要請」を表すグループⅢの「ゾ」も、現実を正しく認識していない聞き手に対する注意喚起のために用いられることがあるが、「ゾ」が「現実を正しく認識せよ」と指示することに重点を置くのに対し、「ガ」は「現実は…なのになぜそれがわからないのか?」という話し手の違和感を表出することに重点が置かれる。

- (41) (聞き手がもたもたしているのを見て)
a. ハヨ センナン チコクスルガ。
(早くしないと遅刻するよ。(なぜそんなこともわからないのか?))
b. ハヨ センナン チコクスツゾ。
(早くしないと遅刻するぞ。(ちゃんとそのように認識して。))

次の例では、話し手自身が過去に誤った認識を持っていたことに対して「なぜこんなことがわからなかったのだろうか?」という違和感を持っていることが「ガ」で表される。

- (42) (探していたものが予想外の場所で見つかった)
ナンヤ。コンナトコニ アッタガ。

(なんだ。こんなところにあったよ。(なぜこれまで気がつかなかっただろうか?))

2.で述べたように、「ガ」は推量形にもつく。その場合、「なぜこんなこともわからないのか?」(例43,44)という気持ち、あるいは「聞き手は自分からは…と言わないだろう」(例45)という気持ちで、聞き手に確認を求める文になる。

(43) (聞き手がものを乱暴に扱っているのを見て)

ソナシタラ コワレテシモヤロガ。

(そんなふうにしたら、壊れてしまうだろうが。(そうだろう?))

(44) (聞き手が自信がないような様子でいるのを見て)

アンタ ヤリヤ デキヨガ?

(あなたはやればできるだろうが? (そうだろう?))

(45) (雪が降る中を帰宅した聞き手に)

ソト サムカッタロガ? (外は寒かっただろう? (そうだろう?))

まとめると、「ゼ」、「ジャ」、「ガ」は、「既存の認識と現実とが矛盾する状況の中で話し手がどのような立場に立っているか」を表すと言える。

(46) ゼ : 話し手が既存の認識と現実との間の矛盾にとまどっている。

(話し手は現実を「何かの間違い」だと思っている。)

ジャ : 話し手が自分の認識を誤りと認めて現実を受け入れる。

(話し手は自分の認識が誤りだと思っている。)

ガ : 他者の認識 (あるいは話し手の過去の認識) の誤りに対して違和感を覚えている。

(話し手は他者 (あるいは話し手の過去) の認識が誤りだと思っている。)

次の三つの文のニュアンスの違いも、これにより説明できる。

(47) (負けるはずはないと思っていたチームが負けた。)

a. アリヤ、マケテシモタゼ↑。

(あれ、負けちゃったぞ↑。(どういうこと?))

b. アリヤ、マケテシモタジャ。

(あれ、負けちゃったよ。(まったく予想できなかった。))

c. アリヤ、マケテシモタガ。

(あれ、負けちゃったよ。(なぜ予想できなかったんだろう?))

「ゼ」を用いた(47a)は、予想外の現実に話し手が「どういうこと？」ととまどっていることを表す。「ジャ」を用いた(47b)は、「負けるとはまったく予想していなかったが、現実を受け入れなければならない」と感じていることを述べている。「ガ」を用いた(47c)は、相手の（あるいは話し手自身の過去の）見通しの甘さを責めているというニュアンスの文である。

5. まとめ

3.と4.で述べたことをふまえると、2.で見通しとして示した(2)の表は次のように書き換えることができる。全体としては、「既存の認識と現実が矛盾する状況における話し手の気持ちの動き」を表す終助詞「ゼ、ジャ、ガ」が主要な終助詞として一つのグループをなしている点が注目される。

(48)

I	話し手の判断のあり方 (情報の質) チャ：既定事項と確認された内容を提示する。 φ：確定的判断を提示する。 ワ：暫定的判断を提示する。
II	話し手の気持ちの動き ゼ：既存の認識と現実の矛盾にとまどっている。 ジャ：話し手の認識の誤りを認めて現実を受け入れる。 ガ：他者（または話し手の過去）の認識の誤りに違和感を覚えている。
III	聞き手に対する働きかけ ゾ：聞き手に情報の受け入れを要請する。

本稿では、平叙文専用の終助詞のみを対象として意味の体系について考察したが、次の段階では、他の終助詞も視野に入れた形で、終助詞の意味の体系について考える必要がある。他の方言との対照も興味深い問題である。

参考文献

- 井上優(1995a)「方言終助詞の意味分析—富山県砺波方言の「ヤ／マ」「チャ／ワ」—」
『国立国語研究所研究報告集』16、pp.161-184、秀英出版
- 井上優(1995b)「富山県砺波方言の終助詞「ゼ」の意味分析」『言語学論集』4、pp.11-21、

東北大学文学部言語学研究室

井上優(1998)「富山県砺波方言の終助詞「ジャ」の意味記述」、国立国語研究所編『日本語科学』4、pp.122-134、国書刊行会

井上優(2006)「モダリティ」、小林隆編『シリーズ方言学2 方言の文法』、pp.137-178、岩波書店

井上優(2010)「話し手の気持ちを表す方言の文末表現」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』17、pp.49-61、大阪樟蔭女子大学日本語研究センター

小西いずみ(2016)『富山県方言の文法』ひつじ書房